図表 2.22　離婚に対する意識の各尺度得点に対する分散分析の結果

尺度名			30代	40代	50代	60代	検定	Scheffe法
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	男性	平均	17.76	16.94	16.80	16.89	性 *	男＞女
		標準偏差	4.10	5.36	4.58	4.59	年代 ns	
		N	50	54	59	55	交互作用 ns	
	女性	平均	16.55	15.37	14.83	15.14		
		標準偏差	4.32	4.08	4.58	4.62		
		N	73	57	76	64		
離婚する親への否定的イメージ	男性	平均	25.08	23.53	24.26	26.00	性 ***	男＞女
		標準偏差	6.76	5.94	6.63	6.46	年代 ***	60代＞30代,40代,50代
		N	49	55	58	56	交互作用 ns	
	女性	平均	21.12	21.32	22.19	26.22		
		標準偏差	4.69	6.05	6.45	6.58		
		N	73	57	75	65		
離婚に対する否定的評価	男性	平均	2.71	2.36	2.46	2.79	性 ***	男＞女
		標準偏差	1.02	1.11	1.07	1.05	年代 ***	60代＞40代
		N	49	55	59	57	交互作用 ns	
	女性	平均	2.10	1.93	2.22	2.59		
		標準偏差	1.00	0.95	1.00	1.07		
		N	71	56	76	64		
離婚に対する好意的評価	男性	平均	18.68	18.91	18.48	18.77	性 **	女＞男
		標準偏差	2.42	2.93	2.94	2.81	年代 ns	
		N	47	53	58	56	交互作用 ns	
	女性	平均	19.84	19.56	19.52	19.25		
		標準偏差	2.43	3.08	2.82	2.64		
		N	73	57	75	64		
離婚家庭に対する同情	男性	平均	8.50	8.86	8.62	9.13	性 ns	
		標準偏差	1.99	1.94	1.78	2.06	年代 ns	
		N	50	56	58	56	交互作用 ns	
	女性	平均	9.10	8.53	8.52	8.94		
		標準偏差	1.86	2.16	2.21	1.94		
		N	73	57	75	66		
離婚による人間的成長	男性	平均	7.42	7.22	7.05	7.36	性 ***	女＞男
		標準偏差	1.91	1.81	2.01	2.04	年代 ns	
		N	50	55	59	56	交互作用 ns	
	女性	平均	8.15	7.97	8.03	8.14		
		標準偏差	1.85	1.85	2.16	2.18		
		N	73	57	75	66		

注：***p<.001、**p<.01、*p<.05

第3節　結婚に対する意識

1. 結婚に対する意識の実態

(1)結婚に対する考え(Q2)

① 結婚に対する考えの全体的傾向

結婚に対して、「今の世の中、結婚しなくても生きていける」、「問題のある結婚生活なら、早く解消した方がよい」と考える回答者は8割強であり、「男性は結婚しないと、一人前とはいえない」、「女性にとっての幸せは、結婚することではない」と考える回答者は4割であった。8割の回答者が「結婚しても、配偶者とは別に自分だけの人生の目標を持つべきである」と考え、9割の回答者が、「結婚後も、夫婦は互いに異性としての魅力を持つべきだ」と回答した。

一方、「結婚するのは、当たり前のことと思う」、「生涯独身で過ごすというのは、好ましい生き方ではない」、「結婚したら、子どもを持つべきだ」、「結婚生活に、多少の我慢は必要だ」、「一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべきだ」と考える回答者も5割以上いた。昨今関心を集めている夫婦別姓には、8割弱が反対していた。

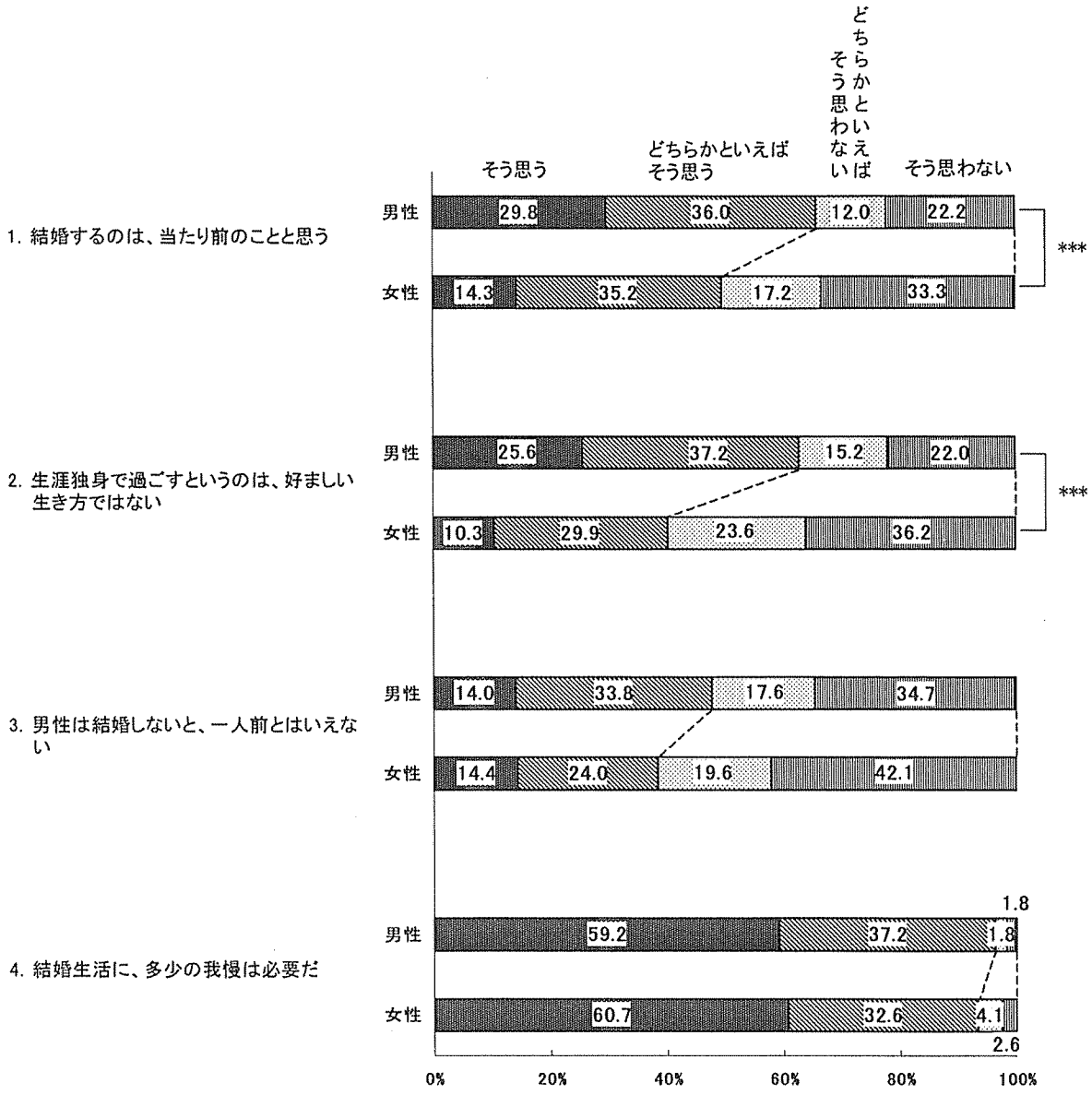
全体として、結婚しないという生き方も選択肢のひとつであるととらえられ、結婚が一

人前の男性や女性としてのみなされるための条件であるという考えは否定されていた。しかし、半数は、結婚をし、子どもを持ち、結婚生活を維持させていくという保守的な結婚観もまた持っていた。

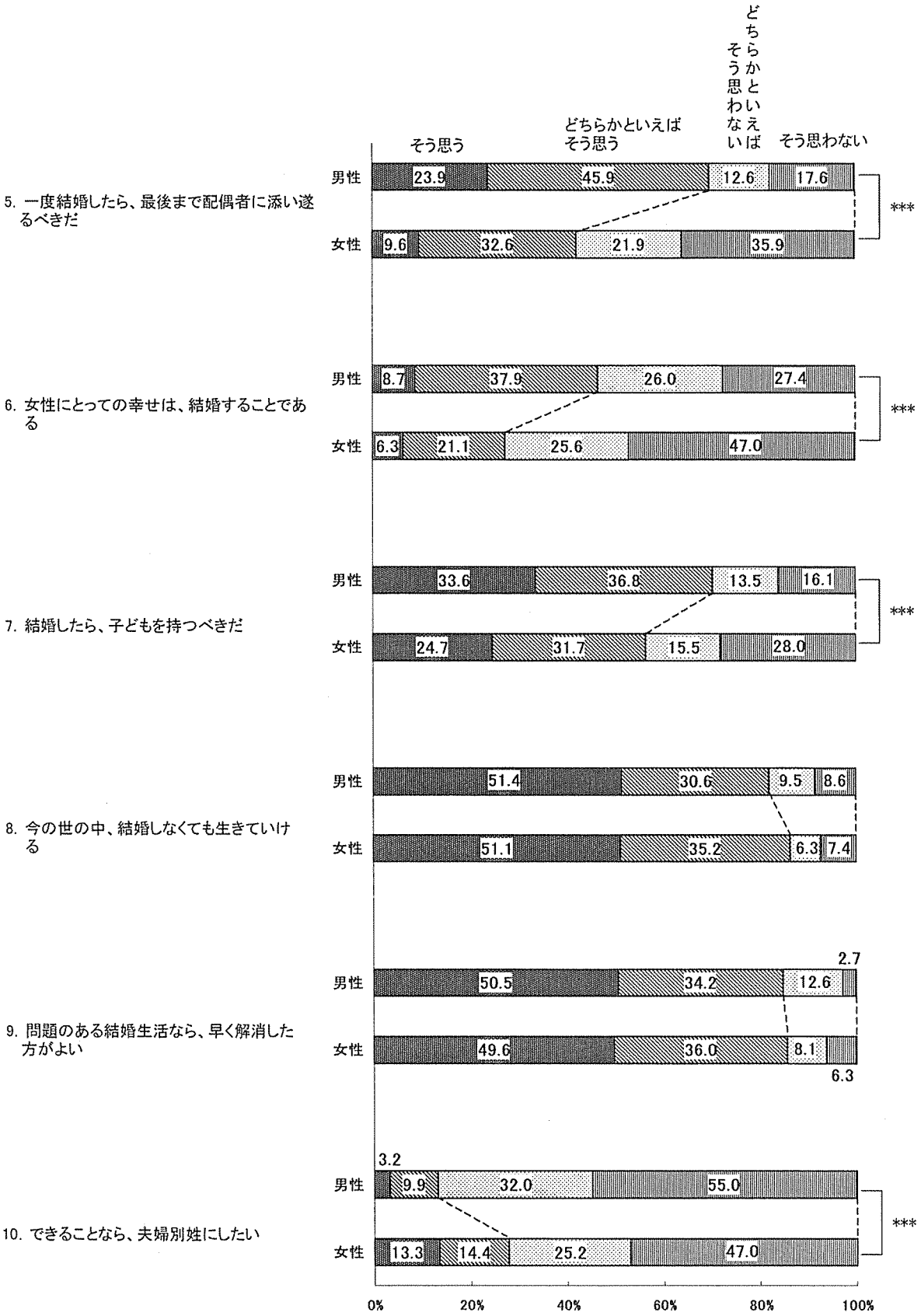
② 結婚に対する考えにおける性差

男女別にみた結婚に対する考えの回答結果を図表 2.23 に示す。

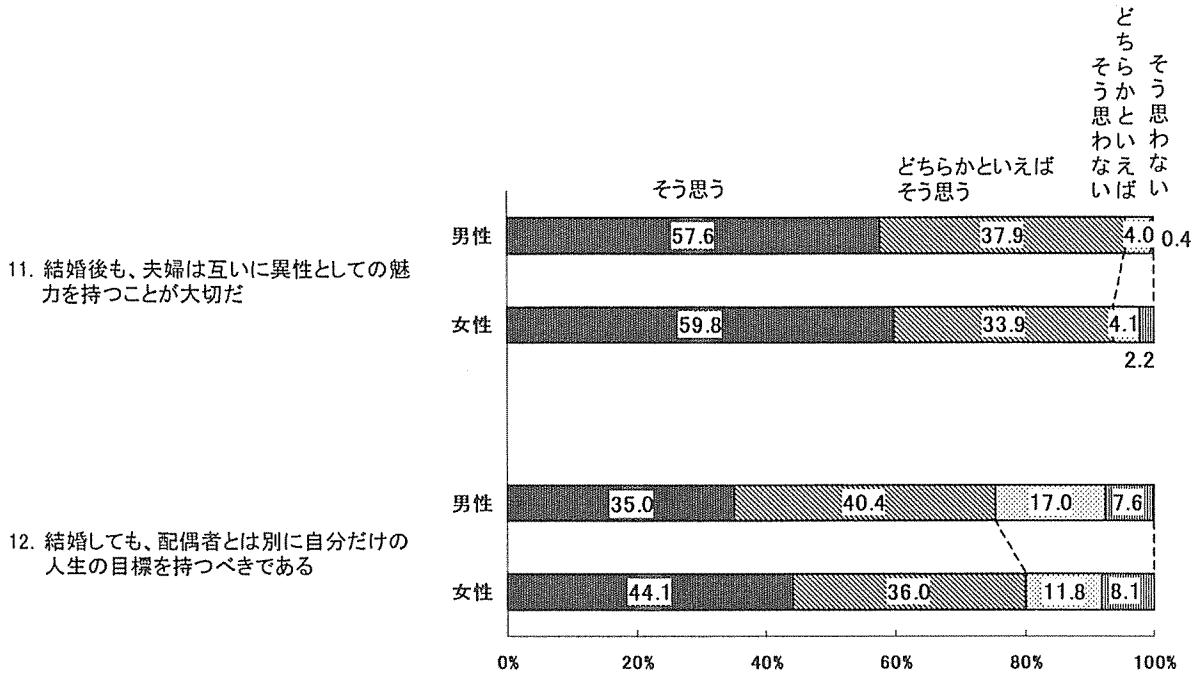
図表 2.23a　男女別にみた結婚に対する考え（Q2）



図表 2.23b　男女別にみた結婚に対する考え（Q2）（続き）



図表 2.23c　男女別にみた結婚に対する考え(Q2)(続き)



男性は女性よりも、「結婚するのは、当たり前のことと思う」、「生涯独身で過ごすというのは、好ましい生き方ではない」、「一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべきだ」、「女性にとっての幸せは、結婚することである」、「結婚したら、子どもを持つべきだ」と考えていた。男性は、結婚に対して保守的な考えを持っており、結婚するのは自明のことという考えが強く、結婚したからには、子どもを持ち、最後まで添い遂げるべきだという意識が高かった。

(2)結婚によって得られるもの・失うものに対する考え(Q3)

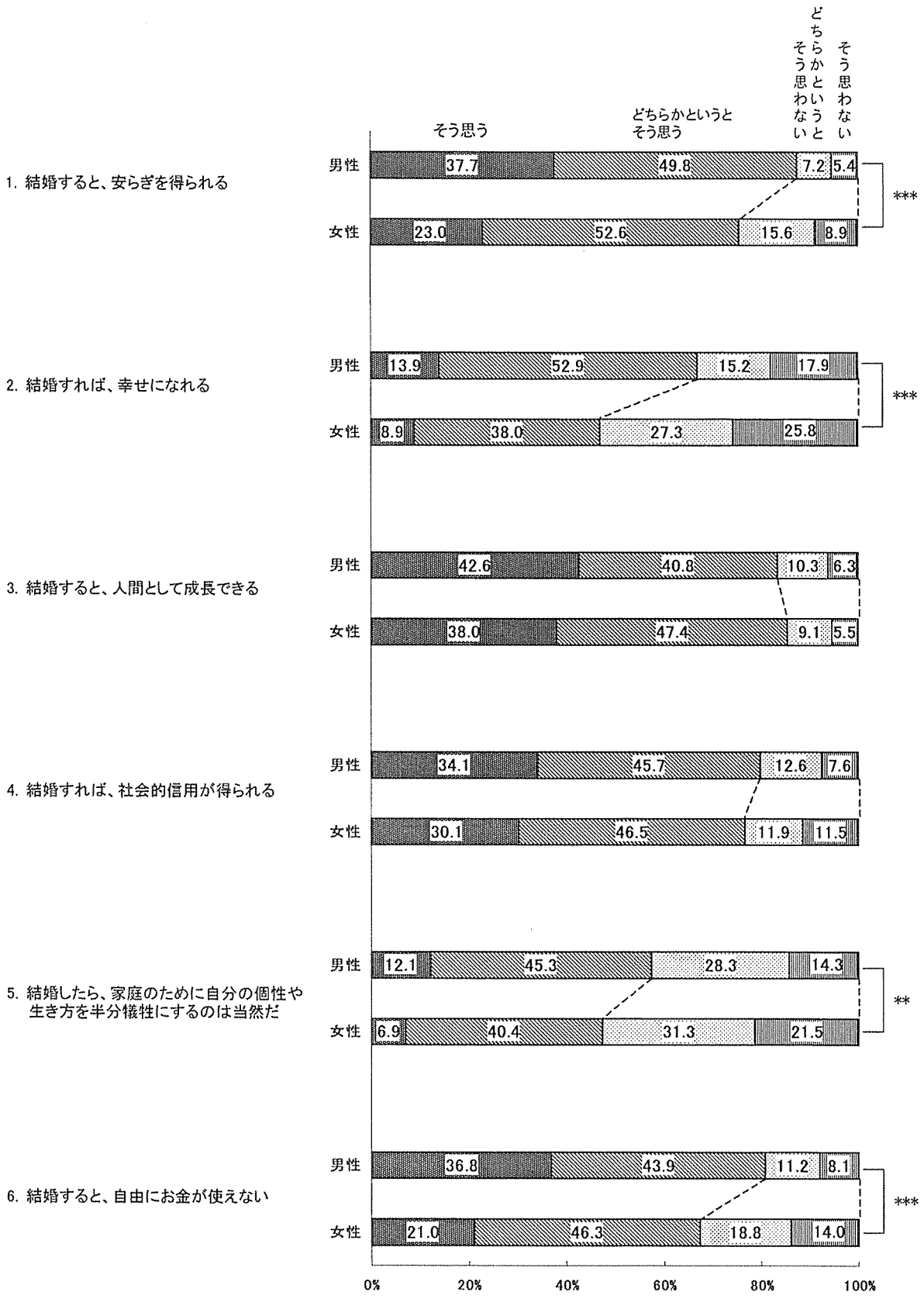
① 結婚によって得られるもの・失うものに対する考えの全体的傾向

結婚すると、「安らぎ」、「人間としての成長」、「社会的信用」が得られると8割前後の回答者が感じていた。一方、7割の回答者が、結婚すると「お金が自由に使えない」、「自分の時間が少なくなる」と感じており、5割以上の回答者が、「家庭のために、自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ」と回答していた。全体として、結婚で得られるものと失うものの両側面が認識されていた。

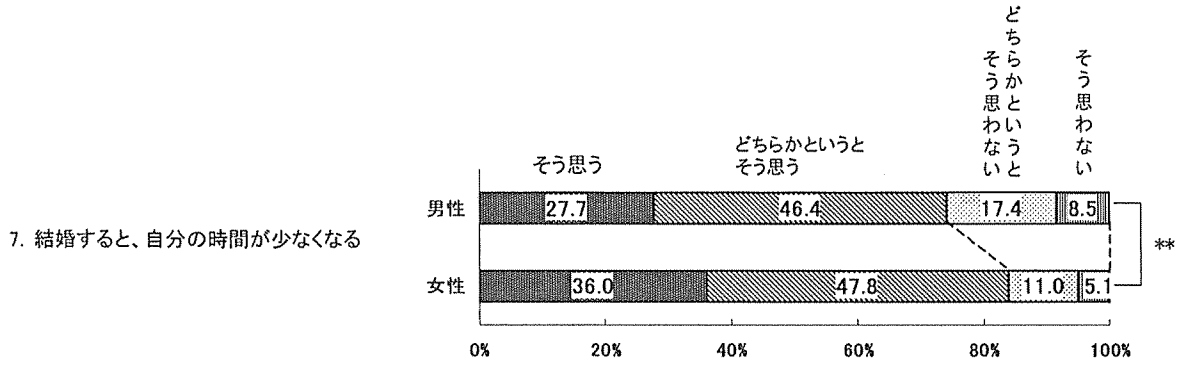
② 結婚によって得られるもの・失うものに対する考えにおける性差

男女別にみた結婚によって得られるもの・失うものに対する考えの回答結果を、図表2.24に示す。

図表 2.24a　男女別にみた結婚によって得るもの・失うものに対する考え（Q3）



図表 2.24b　男女別にみた結婚によって得るもの・失うものに対する考え（Q3）（続き）



男性は女性よりも、「結婚すると、安らぎを得られる」、「結婚すれば、幸せになれる」、「結婚したら、家庭のために、自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ」、「結婚すると、自由にお金が使えない」と感じていた。一方、女性は、「結婚すると、自分の時間が少なくなる」と感じていた。

男性の方が、女性よりも、結婚は、お金を含め自分を犠牲にするものであると感じているが、同時に、安らぎや幸せという結婚によるメリットも強く認識していた。女性は、結婚することにより時間を失うとデメリット感じているが、男性ほどは結婚にともなうメリットを認識していなかった。

2. 結婚に対する意識の構造

(1)因子分析による結婚に対する意識の構造の検討

結婚に対する意識の構造を検討するため、結婚・結婚によって得られるもの・失うものに対する考えのすべてをあわせた全項目に対して、因子分析（主成分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を４点、「どちらかといえばそう思う」を３点、「どちらかといえばそう思わない」を２点、「そう思わない」を１点と得点化された。

固有値１以上の因子について因子数を変化させながらバリマックス回転を行った結果、解釈可能性から、４因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第１因子から順に、21.1%、11.1%、9.3%、8.4%であり、累積寄与率は 49.8%であった。因子分析の結果を、図表 2.25 に示す。

第１因子は、「結婚するのは、当たり前のことと思う」、「生涯独身で過ごすというのは好ましい生き方ではない」などの項目の負荷量が高かったことから、『伝統的結婚観』を表す因子であると解釈された。第２因子は、「結婚すると、社会的信用が得られる」、「結婚すると、安らぎを得られる」などの項目の負荷量が高かったことから、『結婚のメリット』を表す因子と解釈された。第３因子は、「結婚すると、自由にお金が使えない」、「結婚すると、自分の時間が少なくなる」などの項目の負荷量が高かったことから、『結婚による拘束感』を表す因子と解釈された。第４因子は、「問題のある結婚生活なら、早く解消した方がいい」、「今の世の中、結婚しなくても生きていける」などの項目の負荷量が高かったことから、『個人志向型結婚観』を表す因子と解釈された。